

あくまで「横軸ありきの縦軸」 一廃業加速で横軸の重要性は増す一

多胡秀人

2021/3/1

まずは、2019年6月13日の金融庁/政策評価に関する有識者会議の議事録から。

<https://www.fsa.go.jp/seisaku/gijiroku/20190613gijiroku.pdf>

～金融システムの安定と金融仲介機能という、この2つのバランスをいかにとっていくかというのが行政の一番ポイントだと思うんですが、その中でも特に、仮に金融仲介機能を横軸とすると、金融包摂ですとか、事業性評価とか、事業再生とか、こういうキーワードがあるわけですね。縦軸は安定的収益とか、その確保に基づく健全性、金融システムの安定性です。この縦と横の関係で捉えますと、横軸をしっかりさせて結果として縦軸がきちんと達成できるということが重要であると思っております。どうしても縦軸が強く出過ぎると、場合によっては金融排除が起こるといったような本末転倒になりかねないということは常々気になるところであります。縦軸のところというのは、これはファクトということで数字である程度捉えることができるんですが、横軸の金融仲介のところはなかなかファクトとして捉えにくく数値で見てどうこうするというのは容易ではなく、かつ、フォワードルッキングということで、将来の絵を描いていかなければならないわけですね。そこをどうやって見つけていくか、切り込んでいくかの手法が深度ある対話で、今回、この評価書の中にも出てくるキーワードなんですが、深度ある対話がないと切り込めないということも大事だと思っております。(7ページの多胡の発言より抜粋、太字は多胡)

地域金融行政における「縦軸と横軸」の問題は、2003年のリレバンのあり方検討会議以来、常に最重要な論点となっていました。「縦軸」は金融機関の健全性、金融システムの安定であり、一方「横軸」は金融仲介機能の強化、金融円滑化、金融包摂であり、事業変革/事業再生の支援も横軸に内包されます。「横軸」においては時間軸、中長期的視点が不可欠であり、昨今のSDGsの流れは横軸重視に他なりません。

文中にもある通り「縦軸」は計数が容易に把握できることから、過去には金融機関経営も金融行政も「縦軸」に過度に傾斜する局面があったことは否定できませんが、あくまでも「横軸ありきの縦軸」というのが正解です。

「横軸」の主たるリスクは「信用リスク」ですが、企業経営者の高齢化が進行する中でのコロナ禍により、横軸リスクに地元事業者の「廃業」急増という恐ろしいリスク、地域金融機関の基盤を破壊するリスクが加わったのです。

ところで、「廃業」と「企業破綻」を一括りにするような論調があるのには違和感があります。追い込まれての「破綻か、廃業か」という流れはあるものの、黒字廃業が多い現状からしても、2つは別物としてとらえるべきと考えます。

新型コロナウイルスの影響で中小規模事業者の廃業可能性が急激に高まっていますが、地域金融機関の廃業リスクへの対応は十分ではありません。企業破綻は信用リスクの問題であり、財務データ(定性情報も含む)をベースに倒産確率と回収率によってリスク量を計測しますが、廃業の方はそうはいきません。

廃業リスクの実態把握とその対策はミクロ作業(個社ごとの積み上げ)でしか行い得ず、事業性理解が弱体化し、事業者とのコミュニケーションが希薄化し、事業者との信頼関係がなくなっている中では難易度が高いものと考えられます。とはいえ廃業ラッシュに歯止めをかけねば、地域経済・地域社会の崩壊につながり、地域金融機関の存続も危うくなります。

手数料が前面に出る事業承継ビジネス(M&A 専門業者に丸投げも)が、廃業リスクへの対応だとの悠長な傍観者姿勢なら、直ちに考えを改めるべきです。ポストコロナを展望すれば、地域金融機関は単なる資金供給(それもゼロゼロ融資のようなノーリスクの制度融資)にとどまることなく、信用保証協会や中小企業支援組織とタッグを組み、取引先の新様式への事業変革に当事者意識をもってしっかりと関与しなければなりません。

金融システムの安定(縦軸)といますが、いまは地域経済・地域社会の崩壊を止めることの方がはるかに優先度は高いのです。このことに異論を挟む人はいないでしょう。

そういう意味からも、行政サイドは金融システム安定化(縦軸)にこだわるあまり、横軸軽視で顧客本位をなんちゃってでお茶を濁すようなレイジーバンクを甘やかしてはいけません。

(了)

※※※※本稿の無断転載、お断りします※※※※※